

# 文人が聴くドビュッシー——ドビュッシー生誕一五〇周年に寄せて

岡本尚子  
おかもと なおこ  
民博外来研究員

**フランス音楽の引力**  
目の病をわざらうなか、ピアノを学び始めた民博初代館長・梅棹忠夫は、自分がピアノ演奏会を開くとしたらプログラムに入れたい曲として、ショパン、サティ、ラヴェルの曲とともに、ドビュッシーの『亜麻色の髪の乙女』を挙げている。梅棹はモーツアルトやベートーヴェンなどは好みではないとも述べており、どうやらフランス音楽を好んでいたようだ。

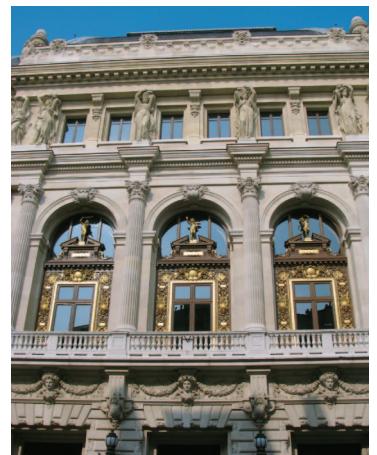
「ピアノのレッスン」に通うと、始めのうちは大抵、バイエルやツェルニー等ドイツ系の音楽を中心にレッスンが進められるが、そうしたなかドビュッシーなどのフランス音楽に触れて、新鮮に感じる人は多いのではないだろうか。筆者は、初めてドビュッシーの曲を課題として与えられたとき、それまで練習していた曲とはまったく違う、不思議な響きに魅了されたことを良く覚えていている。

**ドビュッシーをめぐる音楽批評**  
二〇一二年はクロード・ドビュッシー生誕

家など、「限られた人のためのもの」とされてきたということである。ドビュッシーの音楽をめぐる熱狂は、そうした事態の打開にも役買つていたと推測できる。

**文人の音楽批評が示すもの**

ところで、フランスではさぞかしドビュッシーは崇拜されているのだろうと思いつや、筆者の周りのフランス人音楽愛好家が好むのは、どちらかといえばイタリアやドイツの歌劇や交響曲、リストやショパンといったロマ



『ペレアスとメリザンド』初演がおこなわれたオペラ・コミック座

一五〇周年の年であり、国内外で彼の作品をとり上げる演奏会や催しが数多くおこなわれている。一八六二年八月二二日生まれのこのフランス人作曲家が、マラルメの詩に靈感をえて作曲した『牧神の午後への前奏曲』は現代音楽の祖と評されることもあり、ドビュッシーは作曲家として、音楽史上で重要な位置を占めているということができるだろう。そして、ドビュッシーの音楽は、音楽の専門家はもとより、文人を中心とした当時の多くの知的エリートに熱狂的に迎えられたことは注目に値する。



ドビュッシーの生家を改装した記念館。  
一階は市の観光局、二階が展示室になっ  
ている



記念館の展示室。東洋風の置物などが置いてある



ドビュッシーの墓（パッシー墓地）

保守的な音楽家や評論家がドビュッシーを批判するなか、例えば作家ロマン・ロランは、「一九〇二年のドビュッシー氏の『ペレアスとメリザンド』は、フランス音楽の真の解放の日付を刻んだようと思われる」とし、フランス音楽の未来をドビュッシーに託した。自由な形式と斬新な響きをもつドビュッシーの音楽は、それまで著名な音楽家を輩出していなかった（故に独自性が確立されていない）フランス音楽の個性を確立するのに有効だと、ロランは評している。

そもそもドビュッシーは、象徴派を始めとする詩人や文人たちと親しかったこともあるのだろうが、文人たちはドビュッシーの音楽に象徴派の芸術との共通点を見出し、新しいフランス芸術の旗印として歓迎した。ロランは作曲家として、音楽史上で重要な位置を占めているということができるだろう。そして、ドビュッシーの音楽は、音楽の専門家はもとより、文人を中心とした当時の多くの知的エリートに熱狂的に迎えられたことは注目に値する。

ロランは、歴史的・学術的にはドビュッシーを評価すべきだとしつつも、力強いドイツ音楽や感情表現豊かなイタリア音楽の方が好みであり、フランス人作曲家ならビゼーやベルリオーズの方が好きだと断言しているが、

おそらくこちらの音楽の方が、ドビュッシーの音楽と比べて「明晰さ」を感じるのではないか。そしてそれは、いわゆる「フランス精神」を代表するものもある。（もちろん、ドビュッシーの音楽を形容する際に良く使われることばである「繊細さ」も、「フランス精神」を代表するものではあるのだが。）しかし、この後音楽史上で評価されるのは、常にドビュッシーとその後継者たちであり、彼らによってパリは世界の音楽界の中心となつたといつても過言ではない。こうしたなかロランは、第一次大戦後同世代の音楽家たちに背を向けて、自分が好きなベートーヴェンの世界に閉じこもってしまう。

ロランを始め文人の音楽批評は、ともすれば単なる好みに過ぎないと批判することも出来るだろう。しかし、ドビュッシーを巡る彼らの批評が示すように、音楽史の「教科書」からは読みとれない多くの真実を含んでいるのである。